

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12286

研究課題名（和文）古俳諧の資料基盤構築と古典研究への活用

研究課題名（英文）Basic Research of Kohaikai and its Utilization for the Study of Premodern and Early Modern Japanese Literature

研究代表者

河村 瑛子（Kawamura, Eiko）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80781947

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：古俳諧資料の文学史的意義を再検討するため、古俳諧の研究基盤の整備を行い、それを活用した古典研究を実施した。主な成果としては、(1)古俳書の解題目録の完成、(2)古俳書の全文データの集積、(3)黒川道祐紀行日記群の基礎研究、(4)『俳諧類船集』の注釈的研究とその古典作品読解への応用、(5)芭蕉作品の新解釈の提示、(6)国語辞書未収載語の語義究明が挙げられる。以上の研究成果を3編の論文と1件の講演によって公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世前期に隆盛した貞門・談林の古俳諧は、俗語語彙を文字上に豊富に取り込み、言葉の連想（つまり当時の人の共通認識）を軸に展開する文芸であり、古人の世界観を知りうる資料として貴重である。本研究は、この稀有な文化資源を万人が自在に利用できる環境を構築するための基礎研究であり、その活用の可能性を具体的に示そうとするものである。本研究の成果は、芭蕉作品の解釈をはじめとする日本古典文学研究に寄与するのみならず、広く日本文化研究や隣接諸学にも貢献しうることが確認された。

研究成果の概要（英文）：In this study, in order to reexamine the significance of kohaikai in the history of Japanese literature, I conducted basic research of kohaikai and utilized the research results for the study of premodern and early modern Japanese literature. The main results include: (1) An annotated bibliography of kohaikai-books; (2) Transcription of kohaikai-books with searchable full-text data; (3) Basic research of Kurokawa Doyu's travel diaries; (4) An annotation of Haikai ruisenshu and its utilization for close reading of premodern and early modern Japanese texts; (5) New interpretations of Basho's literary works; (6) Clarification of meaning of words not included in existing dictionaries. The above results generated three journal articles and one academic presentation.

研究分野：日本文学

キーワード：古俳諧 貞門 談林 芭蕉 黒川道祐 書誌 書簡 初期俳諧

## 1. 研究開始当初の背景

近世前期に隆盛した貞門・談林の古俳諧は、俗語語彙を文字上に豊富に取り込み、かつ、言葉の連想(つまり当時の人の共通認識)を軸に展開する文芸であり、古人の世界観を知りうる資料として貴重である。しかしながら、従来、分量の膨大さと文学史的評価の低さのために資料基盤が未整備であり、全集はおろか十全な作品目録さえ備わず、古俳諧を正面から取り扱う研究に乏しかった。

研究代表者はこれまで、「古俳諧の全文データ集積に基づく『俳諧類船集』重要語彙の研究」(JSPS 科研費 13J03043) 京都大学若手研究者スタートアップ研究費、「近世前期中期俳諧資料の整備と活用の研究」(JSPS 科研費 16H06877) 等において、古俳書の解題目録の作成、未翻刻作品の読解翻刻をはじめとする古俳諧資料の基盤整備に取り組み、その全文翻刻データの蓄積と、文化史的に重要な貞門の連想語辞書『俳諧類船集』と用いた古典研究を進めてきた。

しかしながら、膨大な資料を前に、資料基盤整備は道半ばである。古俳書の解題目録の整備と古俳書の読解翻刻をさらに推し進め、万人が利用できるよう公開に努める必要がある。これまでの調査の過程で、重要な未調査資料の存在すること、また、個々の俳書の性格を把握し、難解な古俳諧作品を正確に読解するために、諸本や書物同士の連関についてもさらなる調査を要することが判明した。主として資料基盤の未整備のために、『俳諧類船集』の全注釈は未だ完成しておらず、これについてもいっそうの進展が求められる。古俳諧作品および『俳諧類船集』は、通常の文献には現れにくい日常的な素材・語彙を大量に含むため、注釈には困難が伴う。この問題の解消を含む、より適切な注釈方法の吟味が必要であり、その対応策の一つとして、古俳諧資料以外の文献に関しても、分析に用いる資料の整備を要することを認識した。

## 2. 研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では、古俳諧の総合的な研究基盤の構築に取り組み、それをもとに、これまでより高い水準での古典研究の達成と、古俳諧の文学史的意義の再検討を目指す。

基盤整備においては、まず、古俳書の網羅的な作品目録としての古俳書解題目録の完成・公開を目指す。これにより、古俳書の全貌を把握し、将来的に古俳諧の全集を編む際の基礎情報を社会と共有することが可能になる。また、これまでの研究では規模の大きさ故に手薄であった発句集を中心に、未翻刻の古俳書の読解翻刻を進め、全文テキストデータの集積・公開に取り組み。さらに、古俳諧作品の読解および『俳諧類船集』注釈作業を円滑に進めるための参考文献の整備にも着手する。本研究では近世前期文化を理解する上での情報に富む、黒川道祐の紀行日記群を対象とする。

古典研究への活用においては、まず、以上の基礎研究をもとに連想語辞書『俳諧類船集』の注釈作業を行い、言葉の精密なニュアンスの把握に努める。同時に、膨大かつ難解な本書の注釈方法の構築にも取り組む。そして、如上の成果を広く古典文学研究の精読へと応用する。以上によって、古俳諧の文学史的意義を提示したい。

## 3. 研究の方法

本研究は「(1) 基盤整備」と「(2) 古典研究への活用」から成る。それぞれの方法については以下の通りである。

### (1) 基盤整備

#### 古俳書解題目録の作成

古俳書の全貌を捉えるための基礎として、これまでの研究で作成した解題目録の補訂を進め、公開を目指す。新出資料の調査、既知の俳書の諸本調査、目録の記述内容の検討のため、全国の所蔵先に赴き、また複写を取り寄せて調査を行う。各書目には、書型、数量、編著者、成立、内容(諸本の情報を含む)、句数、所蔵先、複製・翻刻・参考文献等の事項について記述する。俳人の伝記的記述や俳壇状況、散逸書についての情報や、俳風の特徴など、特記すべき点がある場合は本文を引用しつつ注記し、書名・人名索引を付して資料集としても活用できるようにする。句の他出や装訂・筆跡の類似など、他の俳書との関連についても記載し、書物同士の有機的連関が浮かび上がるようにする。また、散逸書についても書籍目録等によって可能な限り記述し、俳諧史の総体的把握に努める。

#### 古俳諧作品の全文翻刻

上記の解題目録をもとに、規模の大きい発句集を中心に原本の複写を取り寄せてパソコン

で読解翻刻を進め、翻刻データを蓄積し、自在に語彙検索が可能な環境を整える。その際、の古俳書解題目録の作成時に判明した諸本や他出の情報を踏まえて、適宜本文校合を行う。また、複写物による判読が難しいもの等については、所蔵先に赴いて調査を行い補完する。

#### 古俳諧作品および『俳諧類船集』注釈のための参考文献の整備

黒川道祐の紀行日記群の翻刻と注釈を行う。当該資料群は、京都住の著者が近畿の各地へ赴いた際の記録であり、岩瀬文庫所蔵に自筆本の一部が伝わり、ほかに自筆本の散逸部分を含む数種の伝本がある。従来自筆本に基づく翻刻や研究が備わらず、諸本の問題についてもなお検討の余地があるため、本資料群について月一回程度の研究会で会読を行い、翻刻・校合・校訂と注釈を集積する。

### (2) 古典研究への活用

まず、同時代の重要作家である芭蕉と西鶴の作品をはじめとする古典文学作品・関連資料について、解釈上の問題点を整理する。とりわけ芭蕉については、近年多く紹介された新出資料を含めて重点的に検討する。その上で、『俳諧類船集』の見出語のうち、注釈を施すべき重要語を選定し、(1)の資料基盤を活用して見出語と連想語との関係を実証的に明らかにすることを通して、見出語の精密な語義・ニュアンスを明らかにする。以上の成果を、解釈上の問題を整理した古典文学作品の解釈に反映する。また、『俳諧類船集』注釈作業の積み重ねを踏まえ、同書全体にわたる特性についても把握に努め、本書の運用および注釈上の問題点についても整理する。

## 4. 研究成果

本研究の成果について、「(1) 基盤整備に関わる成果」と「(2) 古典研究への活用に関わる成果」に分けて記述する。なお、感染症拡大の影響で資料収集や調査・作業に様々な困難が生じ、当初の計画を変更せざるをえなかった部分がある。

### (1) 基盤整備に関わる成果

元和頃から天和末年に至る古俳書(写本や散逸書を含む900点弱)についての解題目録「古俳書年表稿」を完成し、公開に向けて校正を進めた。陽明文庫所蔵資料をはじめとする公家の俳諧資料や、寺社所蔵の俳諧資料、近年の新出資料についても可能な限り調査に赴きこれに加えた。これにより古俳書の書目の大部分を梗概とともに一覧できるようになり、古俳書の全集を編む際の基盤が整った。また諸本調査および他書との関係性の整理によって、いくつかの古俳書の基礎情報について先行研究の記述を補訂した。その一部を示せば以下の通りである。

談林俳諧の盛期に刊行された貞門俳書『花千句』(季吟・湖春・正立著)は、延宝3年の序文と奥書が備わるが、従来刊記が未詳であった。祐徳稲荷神社中川文庫所蔵本の後見返しに、延宝3年12月京都谷岡七左衛門の刊記があり、同伝本の表紙が見返しの料紙を含めて原装であることから、本書の刊記と認定した。谷岡は『続山井』をはじめとする季吟系俳書の版元であり、この点からも本書の刊記であることが裏付けられる。また、談林俳諧史上の重要書である『談林十百韻』(松意編)は、従来刊記がなく、延宝3年11月の自跋を備えたとされる。調査の結果、現存諸本の自跋の年記は入木と判断される。一方、洒竹文庫蔵の写本『ふみはたから』所収の本書の写しには、自跋の年記の代わりに延宝3年11月25日、江戸因幡町板木屋太郎兵衛の刊記があり、これが初版の刊記と推定される。

本年表稿を通して、作品分析や史的研究、伝記研究等、多方面の研究に寄与する情報を提供することも可能となった。たとえば和漢俳諧について、尾形功「和漢俳諧史年表」(『和漢俳諧史考』句附成立素因に関する一考察)、『連歌俳諧研究』112)にいくつかの作品を付け加えることが可能であり、作品分析への活用が期待できる。また、矢数俳諧に代表される速吟の営みは、本年表稿によれば、貞門期以来、前書等にその痕跡を見出だすことができ、速吟の史的展開の究明に寄与する。『喜得独吟集』(延宝5年刊)には、伊豆住の著者が、『野ざらし紀行』にも登場する其角の師・大顛和尚(幻呬)と俳席を共にし、詩聯句の教えを受けたことが記され、幻呬の伝記に一事項を付け加えることができる。このほかにも古俳書の前書は、当時の文化状況や人的交流に関する記事に富み、広く近世前期の文化研究への活用が可能であることが明らかになった。

上記の解題目録の作成と並行して、古俳書の全文データの蓄積も着実に進めた。その一部は解題と編者の伝記研究を付して公刊した。古俳書には辞書に記載されない語彙が散見するが、本研究で蓄積した全文データがその解明に資することが確認できた。以下に一例を挙げる。『誹諧花鳥千句』(寛文9年以前刊)第四百韻「花もなき堂にしはらく友待て / 矢数きみあふ永き日のそら」の「きみあふ」を翻刻校訂する場合、「きみあふ」「ぎみあふ」の二通りがあり得る。『日本国語大辞典第2版』等に掲載される「きみあう(気味合)」の語義(互いに気持があう。意気投合する)は句意にそぐわず、一方「ぎみあう」については主要な辞書類に立項されない。そこで古俳諧の全文データを検索すると、いくつかの例が見出だされ、当該語は「競う、対抗する」の意と推測される。近世中期の浮世草子に古俳諧と同用法の「ぎみあふ」(濁点ママ)の例が見出だされ、北陸の方言に「ぎみあい」(競争、対抗)があることをも勘案すると、『誹諧花鳥千句』

の例は「ぎみあふ」と校訂するのがふさわしく、語義も上記推定の通りで矛盾しない。このように、古俳諧の全文データの蓄積は、従来の国語辞書の不備をも補う可能性がある。なお、(1)の成果の一部を学術講演にて発表し、社会への還元を試みた。

また、黒川道祐の紀行日記群については、西尾市岩瀬文庫蔵の自筆本のほかに、自筆本の散逸部分を含む伝本として、従来未紹介の京都大学附属図書館谷村文庫蔵『西北紀行』、東京文化財研究所蔵『黒川道祐翁紀行』を把握し、これらの諸本をも踏まえて研究会にて会読を行い、『西北紀行』『東西歴覧記』の全体と『東北歴覧』の一部について翻刻・校合・校訂・注釈を完了した。当該資料群は、通常の文献に残りにくい日常的な記述や、言語、伝承、地理、人的交流などの情報に富み、その整備は、古俳諧資料の理解に資するのはもちろん、近世前期・中期の文化史研究にも貢献することが確認された。

## (2) 古典研究への活用に関する成果

『俳諧類船集』の注釈的研究においては、(1)で整備した基盤を活用して連想語の分析を行い、さらに、本書の依拠書物とその利用の実態や、口承文芸を含む多岐にわたる知の背景を検討し、それらを踏まえ、本書の文学研究・文化研究上の活用可能性について、梅盛の伝記研究と併せて論文にまとめた(刊行準備中)。これにより、近世文学研究における基本的な工具書として頻用される本書の運用上の留意点を示しつつ、本書の資料としての潜在力の一端を明らかにした。

また、芭蕉作品の解釈に関して新見を提示した。主なものを示せば以下の通りである。

芭蕉が伊賀上野の土芳のもとで詠んだ発句「かにゝほへうにほる岡の梅の花」について、『俳諧類船集』に「岡」単独での立項が見られない一方、名所の「岡」が多数立項されることから、「岡」の語は俳諧的な連想に乏しく、名所としての性質が意識されやすい語であると推測される。「うにほる岡」という措辞には、故郷の岡を、歴史性を内包する名所に準えて称美する意図があり、それが当地で俳諧に専心しようとする土芳への挨拶となる。また、当該句の前書に見える高梨野也は、かつて伊賀上野俳壇における指導的立場にあったものの、当該句の詠まれた当時は伊賀からも俳諧からも離れていた人物で、土芳とは対照的に映る。以上を踏まえて、当該句文が土芳入庵の春という時期にふさわしい一編であったことを示した。

『笈の小文』所収の芭蕉発句「旅寝してみしやうき世の煤はらひ」は名古屋での詠であり、従来、漂白の旅人としての芭蕉が浮世の営みを眺めるといふ、芭蕉の恬淡とした姿勢を強調する解釈が主流であった。古俳諧以来「煤払」は世俗の煩わしさを象徴する言葉として詠まれる表現伝統がある。当該句においても「煤はらひ」には世塵の意味が含まれ、それは世俗の塵埃を厭う「旅寝」とは対照的な概念である。芭蕉発句の「旅寝」が基本的にその場に宿泊する意で用いられ、滞在先への挨拶句に頻用されること、また、尾張滞在中の芭蕉が、門人の歓待によって意に反する長逗留を余儀なくされていたことを勘案するに、当該句には、俗世を逃れようとして旅に出ながら、かえって世塵を連想させる煤払を目にすることになった矛盾を苦笑するニュアンスがある。『笈の小文』中の当該句の解釈においては、意に沿わぬ滞留は風狂の高まり故の長逗留として肯定的に捉えられ、上記の苦笑はそれがもたらした詩情として、俳諧熱の高揚のただ中にある尾張門人への挨拶となることを指摘した。

本研究の目的は、古俳諧という稀有な文化資源を、あらゆる人が自在に利用できる環境を整えるための礎を築き、その活用の可能性を具体的に示すことで、古俳諧の文学史的意義を見直すことにあった。ここまで述べた研究結果からは、まず、古俳諧の基礎研究が古典文学作品の解釈に貢献し、文学史上の諸問題の解決に資することを確認できた。古俳諧以後の俳諧作品において、古俳諧以来の表現史を反映する例が存在することは、語彙資料としての価値にとどまらない古俳諧の文学史的意義を示唆している。また、多様な情報を含む古俳諧資料は、古典文学研究のみならず、日本語学や民俗学等の隣接分野にも有益な資料となり、広く日本文化研究に貢献する可能性があることも明らかになった。本研究の成果を土台として、今後、さらなる古俳諧資料の基盤充実と活用の可能性を開くことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河村瑛子	4. 巻 18
2. 論文標題 『笈の小文』旅中書簡小考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 雅俗	6. 最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河村瑛子	4. 巻 88-12
2. 論文標題 頼原文庫の古俳書零本 『鄙諺集』巻六について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 42-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河村瑛子	4. 巻 8
2. 論文標題 高梨野也小考 芭蕉句文「うに掘る岡」をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河村瑛子
2. 発表標題 ことばの研究のこれからを考えるために 古俳諧研究の立場から
3. 学会等名 国文学研究資料館創立50周年記念式典（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------